HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自己内省の観点からのライフストーリーの再読について ： 留学生の成長をサポートするビジネス日本語教育実践を目指して
Author(s)	久野, 弓枝
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 130, 85-98
Issue Date	2018-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.130.85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68857
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-1882-1669-130.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

自己内省の観点からのライフストーリーの再読について

― 留学生の成長をサポートするビジネス日本語教育実践を目指して ―

久　野　弓　枝*

【要旨】労働人材の国際化に対応するため，ビジネス日本語教育を就職支援として整備することは急務である。一方で，留学生の多くは青年期の中にあり，その重要課題にそれぞれが向き合っている。本稿では学部留学生に対するライフストーリー研究から，動機づけと行動の実情に着目し，留学前から進路決定に至るまでの成長要因を明らかにする。さらに，ライフストーリーには記述できなかったダイアローグの再解釈を行う。
【キーワード】青年期の留学生，ライフストーリー，進路選択，ダイアローグ分析，ビジネス日本語教育

1．はじめに

国境を越えた人材の需要が高まる中，就職支援として効果的なビジネス日本語教育を整備することは急務である。ビジネス日本語教育の学習者が学部留学生である場合，大学から社会への移行（以降トランジション）等，青年期の重要課題に向き合う彼らの実情を踏まえた言語活動への支援が必要であると考える。しかし，留学生がどのように大学生活を送り，進路を決定しているのか，ということについては十分検討されているとは言えない。

筆者は平成25年から学部留学生に対してライフストーリー研究を行い，留学生の大学生活の内実と進路決定に至るまでの発達過程を描き続けている。その調査を行う中で，彼らは複数言語化における環境下でアイデンティティの変容を起こしながら日本語の能力も常に変化していること，また，彼らが進路を決定する際，その意思決定の要因は非常に複雑で重層的ではあるが，知人の助言に対する考察と分析等，内省を促す自己行為能力の向上が重要となることがわかってきた（久野2015，2016）。

本稿では日本語教育を人間的成長の研究と捉え，成美さん（仮名：元中国人学部留学生，女性）の留学生活と進路決定に関するインタビュー調査をもとに，彼女の成長につながったと考えられる要因を動機づけと行動の観点から分析する。そして，筆者自身の調査経験とライフストーリーの作成過程から得た知見をもとに，日本語教師として留学生の成長にどのように関わっていったらいいのか，を言及する。そのために，まず，誰が，いつ，どこで，何を，なぜ，どのようにといった出来事や行為の展開過程を語っている「物語世界」（桜井2002：126，2012：72）に注目する。次に，インタビューの中で彼女の語りの意味が理解できず繰り返し確認を行ったダイアローグ，つまり「反ストーリー」（桜井2012：128-130）について検討する。「物語世界」だけではなく，ダイアローグに注目するのは，筆者の日本語教育・留学生

* 札幌大学
DOI：10.14943/b.edu.130.85

教育に対する構えに気づき，今後の日本語教育実践へとつなげることが可能だと考えたからである。

2．先行研究の問題点

ビジネス日本語教育研究には，シラバス構築のための日系企業に対する一連の調査研究（堀井2009，2011，2012）や就職活動支援のための学部留学生に対する多くの実践報告（三宅20015等）がある。また，留学生の離職率を下げる目的や高度人材・グローバル人材育成という観点から日本企業や日系企業に就職した元留学生に対する研究も実施されている。しかし，総じてビジネス日本語教育研究や留学生の就職支援に関する研究は青年期の重要な課題である大学から社会へのトランジションにおける成長の過程を詳細に描いた研究が少ない。一方，大学から社会へのトランジションや青年期に関する研究は，マイノリティである留学生の個々の状況を配慮した研究が不足していると考えられる。奥田（2015）は，企業・社会の変化を看取した教育構想の必要性を認めながらも，ビジネス日本語教育が教育の分野に属するならば企業や時代が要請する人材モデルを無批判に受け入れた研修だけではなく，留学生の人間的成長にどのように関わっていくかを検討することも必要であると指摘している（p.15）。本稿の目的は上記の奥田の指摘とも重なるが，ビジネス日本語教育を人間的成長に必要な言語活動一般の問題として考え，進路決定に至るまでのストーリーを検討する。また，ビジネス日本語教育とは関係がないと思われ，見過ごしてしまいがちな調査協力者の語りに注目することでビジネス日本語教育実践を新たな視点から捉え直す。

3．調査の概要

短期間で課題を解決しながら進路を決定しなければならない中国人編入留学生（仮名：成美さん）に半構造化インタビューを行い，進路決定に至るまでの過程を分析・考察する。

3-1　調査の手続きと内容

調査協力者に研究の内容を説明し，調査の承諾を得た後，中国での大学生活から現在に至るまでの経験について筆者の研究室で半構造化インタビューを3度行った。詳細は表1の通りである。

表１　調査実施日と要した時間

回	実施日	要した時間
1回目	2014年8月8日	約1時間半
2回目	2014年10月9日	約1時間
3回目	2015年2月2日	約1時間20分

インタビューの方法として半構造化インタビューを選択したのは，半構造化インタビューは構造化インタビューとは異なり，調査者のフレームで調査協力者の語りを捉えるのではなく，想定外の語りがあっても，それを軽視することなく，調査協力者の自由な語りを重視するからである。筆者はインタビューの際，大きな設問（①来日前の生活，②来日前の日本語学習の状況，③日本での大学生活，④進路選択の過程）は準備したが，調査協力者の語りを妨げないよう十分注意をし，彼女の声に耳を傾けた。インタビューはICレコーダーに録音した。

3-2　分析方法

分析方法に関しては，Polkinghorne(1995)で紹介されているNarrative analysisを参考にした。Polkinghorneによると，Narrative analysisは，データの構成要素（ストーリーの主人公にとって重要な出来事や行動）を統合して首尾一貫した一つのストーリーを作る方法である。分析方法の手順は次の通りである。

① 録音したインタビュー内容をすべて書き起こす。
② 書き起こしたインタビュー内容を読み直し，重要だと考えた箇所にはアンダーラインを引く。
③ 気が付いたことをトランスクリプトにメモし，対話ごとに見出しをつける。
④ 見出しとその内容をカードに書き出す。
⑤ どのようにして現在の調査協力者が存在するのか，カードを動かしながら出来事と出来事の関係を探る。
⑥ ストーリーを作成する。
⑦ 作成したストーリーを調査協力者に見せて，内容に間違いがないか，確認を得る。
⑧ 間違いがあった場合は，調査協力者の助言をもとにストーリーを書き直す。

４．成美さんの物語世界

調査協力者成美さんの留学から進路選択までのプロセスを彼女自身の語りに添って紹介する。但し，日本語の文法等の間違いについては調査協力者の語りの意味を変えない範囲で修正した。「　」で示した語りは，彼女の言葉を引用したものである。ストーリーの後には彼女の成長を促した動機づけと行動を表2で示した。

4-1　中国での生活

成美さんは中国のF市で1990年に生まれた。彼女の両親は共働きで，父親は国有企業の従業員，母親は中学校でパソコンを教えていたが，彼女が3歳のときには中学校教師を辞め，彼女が10歳のときには自分でネットカフェ経営を始めている。成美さんは母親を「自分より自由なソウル，スタイル」を持った人と思っている。両親が共働きで忙しかったこともあり，祖母が彼女の面倒を見てくれた。祖母は現在80歳になるが，農村での貧しい生活体験，戦争，内戦を乗り越えており，成美さんにとって「強い女性」，「自分を誰よりも愛してくれている人」である。

成美さんの両親は「競争」より「人格形成」を大切に彼女を育て，高等学校も「自ら計画したことを実践できるという自由な雰囲気がある」私立高校を選んだ。高校時代の寮生活は成美さんにとって「大切な経験」となった。彼女は開放的な考えを持ち，私立高校に通わせてくれた両親に対して感謝と尊敬の気持ちで一杯である。

大学では母親がネットカフェを経営していたので，それを手伝いたいという気持ちでソフトウェアを専攻したいと思った。A大学は第一志望の大学ではなかったが，A大学があるB市は景色も素晴らしく，気候もよく，教員たちのレベルも高かったため満足した。A大学の近辺には日系の企業が多く，日系企業からアウトソーシングを受ける機会も少なくなかったので，日本語を勉強しなければいけないと思った。日本語の勉強は１週間に6回あり面白かった。現代の文章においても，「漢字の音読みやフレーズがたくさん残っていて，勉強すれば勉強するほど日本語の勉強は面白い」と感じた。「日本語とは縁がある」と感じ，興味を持って勉強したせいか，成績もよかった。

2年生の時にC先生という中国人の日本語の先生と出会った。C先生は「とても美人でおしゃれで，運動ができて，完璧な女性のように感じた」。自分もC先生のようになりたいと思った。C先生が北海道のD市の大学で修士号を取得したことを知り，C先生が歩いた道を少しでも模倣したいという憧れの気持ちでD市の大学に留学することを決めた。C先生は成美さんにとって人生のモデルとなった。

成美：その先生は以前北海道の大学。やっぱり，少しでも，その先生が見たことがある風景が見たいなという，少女の，大人の女性に対する憧れ。
久野：ああ，じゃあ，その先生に出会って。
成美：はい，はい。少しでもその先生が歩いた道を，その，ちょっと，模倣というか。
久野：その先生が成美さんのモデル？
成美：はい。自分の人生のモデル。

4-2　留学というトランジション

北海道のD市にあるE大学の経営学部に3年次編入した。困ったことはたくさんあったが，同国の先輩が助けてくれた。彼らはE大学の転入生１期生で，「大学を切り開いた人」に思えた。アルバイトを紹介してくれたり，おしゃれな先輩，成績が優秀な先輩，本当に個性豊かな先輩に出会うことができた。成美さんは彼らの長所を見つけて真似をすれば良いだけであった。完璧な先輩がいたわけではないが，先輩を見ていて「一つのことが優秀だと成功できる」と思った。E大学で身近なモデル像を作り上げることができた。4年生になったら，自分も後輩にアドバイスができるような人間になりたいと思った。

成美さんは日本語について悩んだことはなかった。なぜなら，「自分の中国での専攻は，日本語ではないから，できなくても自然なこと。できたら自分を褒める」という覚悟があったからだ。彼女は「無理をしないことも大切」だと語った。

成美さんはゼミでも特に苦労をしなかったと述べている。ゼミの構成員は日本人の男子学生が3名と留学生の女子学生が3名だった。日本人男子学生は，色々と教えてくれたが，異性であること，年齢も違うため，友達になれないことは初めて会ったときから感じた。しかし「ゼミで友達にならなくても割合平気で，全然困らなかった」。なぜなら，競争社会で育って

きたので，困難に出会った時の準備はできていたからだ。また，「起きている現象は自分だけの問題ではなく，その現象の裏側には様々な要因がある」と客観的に考えることができた。

日本人とのネットワークを作るために英語研究部に入った。英語研究部に入ったのは英語が得意だったので，「自分の特技を生かせる」と思ったからだ。

久野：じゃあ，他の何かネットワークみたいのは，どういうふうにつくっていったんですか，日本人のネットワーク。

成美：ああ，あ，サークル入ってみました。はい。英語研究部というサークルに入って。何か例えば，自分が努力しなくても，向こうが仲間として見てくれるんですよ。それがとても助かります。

久野：仲間として見てくれるって感じたのは，どんなときに感じたんです？

成美：どんな活動でも誘ってくれる。一緒に学食する。一緒に活動をやる。

成美さんはサークル活動を通して日本語能力の向上を感じていないが，活動に参加することで「仲間」を得て，スピーチコンテストにも出場した。

久野：サークルに入ることと，日本語能力とは関係があります？

成美：関係があると思いますが，そんなに大きい関係ではないと。あくまでも週1回しか活動はないし。でも，一緒にやることが多いので，そして，ほかの大学のチームと競争するので，こういう雰囲気があって。

久野：競争というのは？

成美：ええと，一番の人生の思い出になることもあります。みんなの前で正々堂々で話す。で，それで，1回目のスピーチはほんとにとても時間かかりますが，みんなからアドバイスをもらって直してオーケーをもらって，そのまま本番出て，それで賞をもらいました。

コンビニでアルバイトも始めた。「留学生にとって最初のアルバイトを探すのは一番大変なこと」だが，「自力で乗り越えなければならない時期だし，誰でも乗り越えられる」と思った。日本語が上手になったのは，アルバイトがとても大きな役割を果たしたと思う。業務用語が多いが，お客さんと直接話し，確認する項目も多いので，「人と話すのは怖くない」と感じるようになった。「留学期間は限られているし色々なことにチャレンジしたほうがいい」と思い，やりたいと思ったことは実践した。1年目の留学生活は「超充実していた」。

4-3　進路選択

成美さんは4年生の時期を「悩みが多い1年間」だったと言っている。それは進路に関する悩みであった。周りの状況も変わった。3年生の時は留学生同士で情報をシェアすることも多く，みんな「わくわくした感じ」だったが，4年生になると，みんなが進路に悩んでいるので「不安な雰囲気」になった。友人が内定を得たり，有名な大学院に決まった時は本当に羨ましかった。最初から日本で就職する気持ちはなかったが，就職が決まった友人を見て，「やっぱり日本で就職するのがいい」とさえ思うようになった。しかし，成美さんは「就職がいいというスモークの中」で大学院の進学を選んだ。なぜなら，彼女の北海道への留学の動

機を作り出した中国人の日本語教師C先生のようになりたかったからだった。大学院に進学すれば，大学の教員になる可能性もゼロではない。理由はそれだけではなく自分の能力・知識不足を卒業論文を作成しながら感じ，さらに経営学に関する知識を深めたいと思った。勉強できる時期を逃したくなかった。

成美さんは大学院に入る際に新しい目標を3つ立てた。

① 経済的な自立
② 大学院修了までに，仕事を自分で選択できる立場になる
③ 一人前になって家族の面倒をみる

成美さんがイメージする大学院生は「社会に出る少し前の段階」であり，一人前になるという意識を持ち，自分のことだけではなく，できれば周りの後輩たちの面倒もみることだ。経済的自立を目標の一つにしていたので，大学院では親からの仕送りを受けず生活のために様々なアルバイトをしなければならなかった。勉強も学部時代とは異なり課題が多く，アルバイトと勉強の両立は大変だった。忙しすぎて「夢は何ですか」と知り合いに聞かれたとき，夢に向かって勉強しているはずなのに，何も答えられなかったのが本当に情けなかった。

大学院の2年目に国費留学生になることができた。大学だけではなく日本の国にも認められたように感じた。「国費留学生になると両親を呼ぶ時も身元保証人がいらないので，両親を気軽に呼ぶことができる」。「両親に日本で楽しい時間を過ごしてもらいたい」，今まで育ててくれた感謝の気持ちを込めて，もてなしたいと思った。

経済的に余裕が少しできて，授業を受ける態度も積極的になり，プラスのエネルギーが溢れてきた。今までより自信がついて，授業でも積極的に自分の意見が言えるようになった。修士論文の作成にも力を入れ，修士論文は成美さんにとって大切な作品となった。修士論文を完成させると同時に，修士課程修了後の進路についても考えた。「ずっと支えてくれて待っていてくれる家族がいるから中国には絶対に帰りたい」と思い，日本では就職活動を特にしなかった。成美さんは帰国することを「一人っ子の義務」だと考えている。中国に帰国してから就職を探す方法もあったが，母国の就職状況が分からず悩んでいたとき，成美さんが学部時代から中国語を教えている会社の社長に，「中国支社があるので，そちらで働かないか」と言われた。中国の富裕層向けの全予約制私立病院での事務，通訳，翻訳の仕事だ。「母国にとにかく帰りたかった」ので，声をかけてくれた社長に感謝した。

成美さんは留学を通して自分が設定した目標を達成し，「予想以上の成長を遂げることができた」と述べた。また，中国にいる友人と比べると「自分は多くのことを経験してきたので，自分の気持に向き合えるし，問題を解決していく能力は上」だと感じている。「これからいろいろな問題があっても，積極的に，自信を持って解決に向き合えると思う」と述べており，社会人になることに対する不安は一度も聞くことがなかった。

4-4 成美さんの「物語世界」に関する一考察

成美さんの大学・大学院時代における成長過程を中心に見てきた。彼女には大きく分けると3つのトランジションがあった。第1は，中国での高等学校から大学へのトランジションであり，第2は，日本の大学への留学，そして第3が，大学から大学院へのトランジションである。

若者のアイデンティティや高等教育を専門とし，トランジション研究においても活発な議論を展開しているジェームズ・コテ（2014）は，学生が大学環境をどのように経験し，そこ

からどんな利益を引き出すかの決定要因として，学生自身の「環境に対する」動機づけと行動が重要だと述べている（p.145）。筆者も彼の意見に賛同し，動機づけと行動の観点から成美さんの成長を促した要因を検討する。なぜなら，動機づけと行動の関係性を見ていくことで留学生の成長をサポートする方策や環境がより明確になると考えた。

表2　成長を促した動機づけと行動

	動機づけ	行動
中国での大学生活	・両親から受けた教育 ・母親と祖母に対する感謝の気持ち ・日系企業 ・中国人の日本語教師C先生 ・日本語の授業	・ソフトウェア学科に入学 ・日本語を勉強する ・日本へ留学する
日本の大学へ留学 ＜学部時代＞	・先輩留学生 ・友達がほしい ・中国人の日本語教師C先生 ・限られた留学期間 ・今まで経験したことがないことにチャレンジしたい ・経営学の知識を深めたい	・真似をする ・英語研究会に入る ・友達を作る ・英語のスピーチコンテストに出場する ・アルバイトをする ・大学院に進学を決意する
大学院時代	・経済的に自立したい ・一人前になりたい ・国費留学生 ・親孝行がしたい ・祖母への恩返し	・アルバイトを増やす ・積極的に勉学に励む ・母国での就職を決める

成美さんの成長要因は表2からも多数あることが分かるが，その中でも重要なものとして3つのことが挙げられるのではないだろうか。第1に，中国人の日本語教師C先生の存在が挙げられる。彼女が「将来的なモデル」となり，「彼女のような完璧な女性になりたい」という強い動機づけが日本語学習や日本留学という行動を喚起し，その動機づけは留学後も続き大学院進学の要因の一つにもなっている。第2に，中国人の先輩留学生の存在が挙げられる。彼・彼女たちは成美さんの「身近なモデル」となり，成美さんは彼・彼女たちの行動を真似ることで，アルバイトやサークルに入るなど成長するきっかけを作り出すことができたのではないだろうか。第3に，家族に対する感謝の気持ちから生まれた「親孝行」，「経済的自立」，「一人前になる」という目標を持ち行動することが，彼女の成長と進路選択の要因に繋がっていると思われる。

5．モデルストーリーからの解放―インタビュースクリプトの読み直し

ライフストーリーを作成するとき，調査協力者に行ったインタビューのすべてがストーリーの構成要素となるわけではない。あるいはそもそもインタビュアに語られていないものすらある。佐藤（2015）は，日本語学校修了者に行った調査の中で，聴き手と語り手の関係性あるいは聴き手の構えによって，他の語りを語りえないものにしてしまう可能性を指摘している。その上で，ライフストーリー研究における自己言及的な考察や記述の意味について論じている。すなわち，聴き手である日本語教師は自らの構えを自覚することで様々な語りの聞き取りと記述が可能となること，さらに，それは教師自身の教育観，学習者観の問い直しにもつながるとも主張している(p.134)。そして，語り手の声を聴いて実践につなげていくことが日本語教師としての「応答責任」だと述べている（p.135）。一方，桜井（2012）は，調査者が先行研究や背景的知識からアカデミズムのコミュニティの典型的な語りの様式を用意しモデルストーリーとなる危険性を述べ，調査者自身のリクレクシヴな自己言及的な点検が必要だとしている（p.109）。そこで，本節では成美さんの成長過程という文脈では記述することができず，筆者が成美さんの語りを十分に理解できずに何度か質問したダイアローグを取り上げて分析する。どの語りのモードにも定着することができない「反ストーリー」の語り（p.128）に着目することで，モデルストーリーの解放へとつながると考える。

5-1　友人作り

筆者が留学生にとって日本人の友達を作るのは難しいという固定概念を持っていることを示しているダイアローグの一部を記述する。筆者は日々，留学生から「日本人の友人を作ることは難しい」,「日本人の学生は何を考えているかよくわからない」という話を聴いている。また，友達作りに苦労している留学生のストーリーを読む機会もあり，留学生にとって日本人の学生と友達になるのは，留学生活の苦労の一つであると考えていた。しかし，成美さんは日本人と友達になることについて「難しくない」と述べている。

久野：友達を作るのって難しくないですか。そうでもないですか。
成美：そうでもないですね。
久野：ああ，そうなの？
成美：まずは馴染むことが大切で。中国人の女の子だと分かると，友達が寄ってきてくれないですよね。
久野：どういう場面で友達を作ったんですか。
成美：まあ，普通に学校で会ったり，外で会ったり。生活でも仕事でも，色々なので，できれば，それを自分も合わせるように。外見的なものとか，それがどうでもいいと思うことは馴染んでほしい。うん。そういう立場を取っていると友達もできると思います。自分で積極的に友達をつくるのは辛い。
久野：辛いよね。
成美：普通で，はい。何から何まで違うのは，ちょっとまずいと思います。
久野：まずいんだ。

成美：はい。自分は外国人だから両面性も大事。違うところが役立つ。
久野：ああ。だから，自分の違うものをもっているところは自信を持ってみたいな。
成美：はい。

このダイアローグから，相手に合せることは自分らしさを失うというマイナスの側面であると捉えることの危険性を感じるがどうなのであろうか。留学生が自己の独自性を大切にしていれば，「譲れることは譲る」という姿勢は，積極的な自己選択と考えてよいのではないだろうか。

筆者は常日頃，留学生に日本にいるのだから積極的に日本人の学生に声をかけて友達を作るように言うことが多かった。しかし，積極的に友達を作りたいという願望があっても，行動に移すにはかなりのエネルギーが必要なのではないだろうか。日本語能力だけではなく，性格，国籍，ジェンダー，相手の状況など様々な要因が絡み合って，友達を作ることを困難にする場合も考えられる。留学生を叱咤激励する前に，個々の留学生を取り巻く環境について聴く必要があるであろう。また，日本人と違うから，違う立場で日本人学生に対してできることはどのようなことなのか，留学生と一緒に考えることが日本語教育実践においても重要だと考える。

5-2　聞くことの大切さ

「母国語だったら言いたいことが言えるのに，日本語では言えないから仲間に入れない」という留学生がいる。そのため，「日本人のように自然な日本語を話せるようになりたい」と望む学生も少なくない。しかし，日本人のように自然に日本語を話すことが，どれほど重要なのであろうか。このような葛藤を抱きながら授業を行っている筆者に，成美さんは聞くことの大切さについて語った。次に示すダイアローグは成美さんが「馴染むことの大切さ」を述べた後，筆者が日本語能力の必要性について成美さんに問いかけたダイアローグである。

久野：日本語はどのぐらい必要だと思いますか。
成美：日本語は別にそんなに。私は，言うより聞く方が圧倒的に大事だと思うので。やっぱり相手の言ってる事はなんとなく把握できるという能力が大事。
久野：ああ，自分が言えなくてもってこと？
成美：他人が言ってる事は理解できれば，簡単な答えでもいいし，単語でも，文章じゃなくてもいいので。
久野：聞く方がやっぱり大事なんですね。
成美：世の中，しゃべることが上手な人はたくさんいるから。逆に，聞いてあげる人が珍しい存在なので，まあ，外国人でも相手の言ってる事が，内容が理解できればそれで十分だと思います。
久野：おもしろいですね。
成美：実は本当に自分がどれほど意見を出してるのかはそんなに重要じゃないですよ。むしろ，それがいらないことだと思いますよ。うん。

彼女は「馴染むことの大切さ」を述べた後，「聞く力」，「聞いてあげること」の重要性を述

べ，自分が意見を述べることに対しては「むしろいらないこと」と言及している。筆者は正直，現段階では，彼女がなぜそのようにはっきり言い切れるのかを説明する材料を持ちえない。しかし，彼女の発言から，筆者が会話能力=自分の意見を伝えるということに重視する傾向があることに気が付いた。

岩田（2015）はこれまでの会話教育が主に学習者の発話の力を伸ばすことに重点を置いてきたとし，聞き手としての役割を重視し，相手の会話を促す教材の必要性を述べている（p.338）。今後は聞き手の役割に注目し，聞き手の役割によってどのように会話が変化していくのか，検討したい。また，異文化コミュニケーションの側面からも今までの発話中心の教育実践を検討する必要があるのではないだろうか。言語メッセージよりもコンテキストに頼る度合の高いコミュニケーション（桜木2013：118）形式を取る日本で，学生間で意見を言う機会がどれほどあるのか，研究の必要性を感じる。

5-3　中国人モードと日本人モードという考え方

彼女の物語世界の中になぜ彼女が肯定的に自分自身を捉え前進できたのかを記述することができなかった。次に，前述したダイアローグの彼女の発言の基盤になっていると思われるダイアローグを記述する。

成美：留学生としてもう一つの，まあ心理的な，なんか，有利なところは，例えば，全体がうまくできてなくても，誰も知らないでしょ。
久野：失敗しても。
成美：ま，いくら失敗であってもそれはD市での失敗。なんか，例えば，日本人だと，それが全部ですよね。
久野：あー，ああ，そういうのがあるのか。日本にいるのは一部って感じ？
成美：まあ，日本モードという，うん。
久野：へえ，日本モードっていう私がいるわけ？　そうではない？
成美：あ，いますよね。日本にいると，きちんと日本人のルール合わせなければならないとか，それが日本モード。帰ってからはまた，中国人の，例えば，よく言われるまあサービス業の悪い対応とかは，自然に受け入れる中国モードと。はい，いつも切り替えしてます。携帯の言葉モードみたいな感じ。
久野：それ，どうやって切り替えられるんですか。日本モードと中国モードって。
成美：なんか自分が日本に滞在している留学生だから。あ，もちろん中国人の代表の一人として日本人にいい印象を与えるように，その，いつものわがままは捨てて日本モードになるみたいな。
久野：はあ，それって苦しくないですか。
成美：いや，楽しんでいる。世の中に人がたくさんいて，普段，人は絶対自分だけに関心があって，周りの人にそんなに興味がないはず。自分がちょっと特殊な人になって，それによってちょっと関心を持ってくれる。それは自分が外国人じゃなければ頑張ってできないことなので。
久野：なるほどねえ。ふーん。

留学での失敗を自分のすべてが否定されるのではないと考えらえるところに彼女の精神的な柔軟性を感じた。しかし,「中国モード」と「日本モード」という2つのアイデンティティを楽しみながら切り替えられる心理状態を説明することは現時点では難しい。ただし,彼女の寛容さや柔軟性が「馴染むこと」や「聞く力」を大切にする彼女の姿勢につながっていると言えそうである。

長谷川 (2013) は一つの文化のみに縛られない状態は複眼的思考を可能にし,異文化コミュニケーションの場においては「橋渡し」として活躍できる最高の状態であると言及している (p. 58)。成美さんも筆者が経験したことがないこのような状態に達しているのかもしれない。

6．まとめ

ここで,物語世界には含めることができなかったダイアローグを記述し分析することの意味を考えてみたい。物語世界はその人を概観するものとしては効果的であることは間違いない。しかし,そこには編集作業が存在し,編集者の効率的な理解にそぐわないものは排除されがちである。また,個々の人間において,その人となりは大きな偉業によって表現されるものではなく,日々の小さな判断や些細な所作の中から僅かに見出されるものである。したがって,物語の大きな構成要素だけからその人の個性を見出すことには限界があると考えるべきだろう。一方,ダイアローグには表現しようとする対象だけではなく,それぞれの場面における機知や判断も数多く含まれている。故に,ストーリー編集によって見過ごしていた調査協力者の個性がダイアローグ分析によって発見できるのだ。さらに,個性を見つけ,その人に対する認識を深めれば,それはストーリー本体の再解釈にも繋がる。ここで重要なことは個人の特性の中にはその人が無自覚なものもあるところである。すなわち,ダイアローグ分析に新たに解釈されたストーリーは語り手自身が自覚していない可能性がある。つまり,今回の成美さんにおいては,本人が自覚していない留学生活の戦略,当然彼女の語りでは明示してないもの,がダイアローグ分析で記述可能となりうるのである。

このように,ダイアローグ分析は,調査協力者の個性のみならず調査協力者が無自覚な事柄や一面を理解する有効な手段の一つと考える。しかし,ここに留まるものではない。物語世界の検討からダイアローグ分析へと進むことにより調査協力者がより身近な存在に感じられるようになった状態は調査者の構えの変化にも繋がり,教育観等に関する内省を促す。もちろん,筆者も例外ではなく,自身の留学生教育や日本語教育を考える際の構に気づいた。今後はダイアローグ分析により十分に議論できなかった部分について,さらに先行研究にあたるなどの作業が必要だと感じている。そして,漠然とではあるが,調査者が調査協力者と自らの内面を知ろうという姿勢こそ,個々の学習者の個性を尊重した日本語教育実践につながるのではないかと考えている。

ところで,筆者は就職支援に重点を置いたビジネス日本語クラスで,今まで経験してきたことに価値を生み出せず身動きが取れなくなってしまっている留学生に留学生のストーリーを使った実践を試みている。2, 3人の短いストーリーを紹介し,多様な日本語学習や進路選択があることを伝え,自分はどのように生きたいのか,問いかけを行っている。彼（女）た

ちの感想文には先輩留学生のストーリーへの共感・反発だけではなく，ストーリーを媒介にした自己の内情が描き出されている。このストーリー使用した言語活動は自己の経験に意味を見いだせず就職活動の入り口で立ち止まっている留学生にとって，自己内省を促しそれを言語化するという点では，ある程度有効な方法であると考えた。しかし，どのようなサポートが必要なのか，ストーリー読後の言語活動としてどのような活動を行ったら効果があるのか，等，今後，検討する余地も多い。

7．おわりに変えて―ライフストーリー研究を振り返って

ライフストーリーという手法に出会ったのは筆者が博士後期課程に在籍している時である。博士論文では日本語を第二言語とする人々が日本語教室や母語教室の担い手になっていく過程を描いた。博士論文の検討会ではライフストーリーの手法について様々な意見をいただいた。そこでの対話は，ライフストーリー研究の必要性を熟考し，説明する訓練となった。本当に効率も悪く大変なのになぜライフストーリー研究を続けているのか。それは，一言で言うと調査協力者を可能な限り多面的に解釈したいからである。また，ストーリーには異分野の人や研究者以外の人々との対話を容易にする可能性があると考えている。

「日本語教育と他分野（教育学他）をつなぐ役割が久野さんの研究にはある」と言ってくださった姉崎洋一先生の言葉は今でも忘れることはない。今回の成美さんのライフストーリー研究にしてもまだまだ検討不足の感が否めないが，モデルストーリーやマスターナラティブに新しい解釈を吹き込められるよう今後も努力していきたい。

引用文献

岩田夏穂（2015）「学習者のやり取りを記述する方法　会話分析を日本語教育に生かす試み」舘岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門』321-341，ココ出版

奥田純子（2015）「留学生への就職支援としての日本語教育―何が学ばれればいいか？―」『留学交流』vol.57，13-22

久野弓枝・中谷潤子（2015）「元学部留学生のライフストーリーから見る進路決定に関わる重要な要因」『2015CAJLE Annual Conference Proceedings』134-141

久野弓枝（2016）「行為能力の発達の観点による元中国人編入留学生のライフストーリー分析―就職支援としてのビジネス日本語教育」『シンガポールビジネス日本語教育国際研究大会論文集』37-48

桜井　厚（2002）『インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方』せりか書房

桜井　厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂

桜木俊行（2013）「言語コミュニケーション」石井　敏・久米昭元他『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション―多文化共生と平和構築に向けて』109-134，有斐閣選書

佐藤正則（2015）「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか　日本語教師として私の構えを記述することの意味」舘岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門』117-137，ココ出版

ジェームズ・コテ（松下佳代・溝上慎一訳）（2014）「アイデンティティ資本モデル　後期近代への機能的適応」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学からの仕事へのトランジション　変容する能力とアイデンティティ

教育』141-181，ナカニシヤ出版
長谷川典子（2013）「自己とアイデンティティ」石井　敏・久米昭元他『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション―多文化共生と平和構築に向けて』37-58，有斐閣選書
堀井惠子（2009）「留学生に対するビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究―中国の日系企業へのインタビューからの考察」『武蔵野大学文学部紀要』第10号，77-89
堀井惠子（2011）「留学生に対するビジネス日本語教育シラバス構築のための調査研究―ベトナム・ハノイの日系企業へのインタビューからの考察」『武蔵野大学文学部紀要』第12号，79-92
堀井惠子（2012）「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究3―タイ・バンコクの日系企業などへのインタビューからの考察」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』創刊号，31-46
三宅真由美（2015）「学部留学生に対する就職準備教育としてのビジネス日本語教育」『信州大学経済学論集』66，11-18
Polkinghorne, D. (1995). Narrative configuration in qualitative analysis. Qualitative Studies in Education, 8, 5-23

付記

本稿は，平成25年度科学研究費（c）課題番号25370594「ライフストーリーを用いた学部留学生の将来像の形成過程に関する研究」の研究成果の一部である。

謝辞

長期にわたり調査に協力していただいた成美さんに感謝申し上げる。

Rereading of a Life Story from the Perspective of Self-Contemplation

－Toward the Business Japanese Education Practice That Supports the Development of Foreign Students－

Yumie KUNO

Key words

foreign students in adolescence, life story, career paths, dialogue analysis, business Japanese education

Abstract

There is an urgent need to develop the business Japanese education as a job hunting support in order to response to internationalization of work human resources. On the other hand, many of the foreign students are in adolescence and facing their own important issues. This paper, focusing on the actual conditions of their motivations and behaviors in the life story study of undergraduate foreign students, clarifies the growth factors from the time before studying abroad to the time when they decide their career paths. Also, this paper, reinterpreting dialogues which could not be described in the life stories and the practice examples which used the life stories.